鳴

二年

画数 14

筆順 ロ 吖 鳴 鳴

オン メイ

クン な＝く＝らす＝る

成り立ち

〝鳥〟という字と〝口〟という字とをくみあわせてつくった字で、「鳥が〝なく〟こと」をあらわしたものです。〝なく〟ということばをあらわし、〝鳥〟にかぎらず、「牛がなく」のにも「虫がなく」のにもつかわれます。

〝なく〟のは「こえを出してなく」ので、「こえを出す」といういみにつかわれますが、「おとを出す」といういみにもつかわれるようになり、〝鳴る〟〝鳴らす〟というつかいかたもするようになりました。

使い方

▽鳥の鳴きかたには、いろいろあります。せんもんかや、野鳥のあいこうかは、鳥の鳴きかたで、その鳥がなんというなまえか、あてることができます。

▽げんかんのチャイムが鳴ったので、出てみると、きんじょの山田さんのおばさんでした。

▽鈴虫はすんできれいな声でよく鳴きます。

▽女の人の悲鳴がきこえたので、びっくりしてかけつけました。

▽雷鳴は、しだいにとおくなりました。

熟語例

▽悲鳴（「キャーッ」という、こわいときなどにあげる声）

▽雷鳴（雷の鳴るおと）

▽鳴動（大きなおとを鳴らして動くこと。「大山鳴動してねずみ一匹」ということばがあります。大きな山がゆれうごくような大さわぎをしたのに、出てきたのは、ねずみが一ぴき。大さわぎをしたわりに、けっかが大したことがないときに、つかうことばです。）

毛

二年

画数 4

筆順 ノ 三 毛

オン モウ

クン け

成り立ち

どうぶつのしっぽのかたちをあらわしたもので、しっぽの〝け〟をあらわした字です。もちろん、いまでは、〝とりの毛〟〝かみの毛〟など、いろいろな〝け〟をあらわすのにつかっています。

〝毛〟はひじょうに〝ほそい〟ものですから、「ひじょうにほそいもの」をあらわすのにもつかいます。

使い方

▽おかあさんは、毛皮のショールをはおっています。

▽おねえさんは、毛糸のセーターをあんでいます。

▽かみの毛がのびたので、おとうさんに、ハサミできってもらいました。

▽おとうさんと、つりにいきました。さおの先に、毛針という、鳥のはね毛のついたとてもほそい針をつけて、さかなをつりました。

熟語例

▽毛皮（毛がついたままの、けものの皮）

▽毛糸（ひつじなどの毛をつむいでできた糸）

▽羊毛（羊の毛。これで、毛糸や、毛おりものをつくります。）

▽毛筆（どうぶつのしっぽの毛でつくった筆。たんに〝筆〟ともいいます。おしゅうじやねんがじょうをかくときにつかいます。）

▽毛細血管（からだのすみずみにいきわたっている、とても細い血管）